

日本体育・スポーツ・健康学会

国外学会参加補助金事業

2024 年度採択者学会参加レター

発行：2025 年 6 月 発行者：若手研究者委員会（担当：交流促進グループ）

国外学会参加補助金事業とは

本事業は、2023 年度より新たに設立されました。

本事業は、日本体育・スポーツ・健康学会に所属する若手研究者・大学院生が国外学会に参加し自身の研究報告を行うとともに、世界の最新の研究を肌で感じ、国外の研究者と交流する機会を得られるよう支援するものです。また、これにより得られた知見や経験を本学会員に還元することで、本学会ならびに我が国の体育・スポーツ・健康研究の発展に貢献することを目的としています。

2024 年度に採択された先生の学会参加報告をお届けします！

- ◇ 広野 泰子 先生 筑波大学体育系（体育方法）
- ◇ 折茂 紗英 先生 日本体育大学大学院（体育心理学）
- ◇ 廣澤 聖士 先生 桐蔭横浜大学（測定評価）
- ◇ 五賀 友継 先生 国際武道大学（体育史、体育・スポーツ政策）
- ◇ 平賀 慧 先生 筑波大学大学院（体育社会学）
- ◇ 樺澤 茉宝 先生 新潟大学大学院（発育発達、測定評価）
- ◇ 太田 明李 先生 中京大学大学院（体育社会学）
- ◇ 甲谷 勇平 先生 慶應義塾大学（体育心理学）

- 学会開催日順に掲載

応募資格者

本事業の採択者は、以下の条件を満たす会員からの申請書を審査し決定されます。

- ・日本体育・スポーツ・健康学会若手の会会員
- ・40 歳未満（当該年度 4 月 1 日時点）の研究者・大学院生
- ・当該年度に日本国外で開催される学会で、筆頭演者として発表する者

2024 年度は、以下の 8 領域が優先輪番の専門領域でした。

人文社会科学系：体育方法、体育科教育、スポーツ人類学、体育・スポーツ政策

自然科学系：測定評価、保健、アダプテッド・スポーツ科学、介護予防・健康づくり

2025 年度も皆さんからの応募をお待ちしております。

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	広野 泰子	所属先名称	筑波大学体育系
専門領域	体育方法		
共同発表者（所属）	藤井範久（筑波大学体育系）		
学会大会名称	42nd International Society of Biomechanics in Sports(ISBS) Conference		
（和名）	第42回国際バイオメカニクス学会大会		
発表タイトル	ASYMMETRY IN OPERATION TO APPLY GREATER INWARD GROUND REACTION FORCE DURING CURVED SPRINTING ON ATHLETIC TRACK		
（和名）	陸上競技場曲走路疾走において大きな内側地面反力を加えるための左右非対称な動作		
派遣期間	2024年7月14日～7月22日	開催地	ザルツブルク（オーストリア）

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
曲走路疾走中に求心地面反力を作用させる動作は、股関節内外転あるいは足関節内外半トルクによって側方ヘキックするような動作と下肢を走路内側に傾ける、あるいは走路内側に向ける旋回によって下肢伸展トルクによって生じる力を側方に作用させる動作に大別される。本研究では、曲走路疾走において左右接地期それぞれの地面反力の大きさと接地期の下肢関節トルクの大きさおよび身体各部の姿勢との相関関係を示すことによって、左右接地期がそれぞれどのような動作によって求心地面反力を作用させているのかを検討することを目的とした。男子短距離競技者15名に曲率半径42mの曲走路における最大下努力疾走を行わせた。分析範囲はスタート後35m付近の接地期とした。平均求心地面反力の大きさは、右接地期では股関節外転トルクと有意な正の相関関係が示された。着地時の姿勢との関係を見ると、左接地期では骨盤および接地脚の内傾と有意な正の相関関係が示され、右接地期では接地脚のみ有意な正の相関関係が示されたが、下肢を走路内側に向ける旋回動作とは有意な相関関係は示されなかった。以上より、曲走路疾走において大きな内側地面反力を作用させる動作は、左接地期では股関節外転トルク発揮を抑えつつ骨盤および下肢の内傾であるのに対して、右接地期では大きな股関節外転トルク発揮とともに下肢の内傾によって大きな内側地面反力を作用させている可能性が示唆された。		

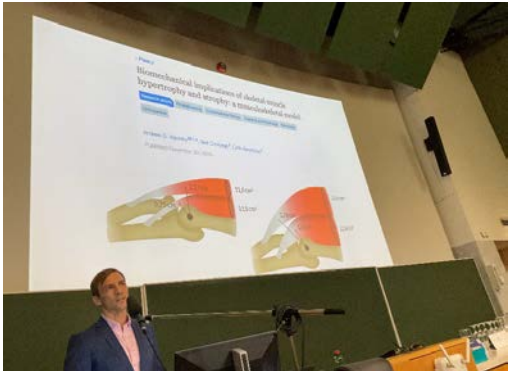
2. 国外学会参加の成果および感想

発表後には、「走路の曲率半径が変わると求心地面反力を作用させる動作も変わるのか」といった質問を頂いた。本研究の実験試技は同一曲走路における曲走路疾走であったが、我々の研究では、進行方向の変更量を意味する求心力積の左右比率は競技者間で異なることが分かっており、その一方で、陸上競技場よりも曲率半径が小さな曲走路を対象にした先行研究では左（内側）脚よりも右（外側）脚の求心地面反力が大きくなる結果が示されている。したがって、曲率半径が小さな曲走路では、左脚よりも右脚で大きな進行方向の変更という要求に対応している可能性が考えられる。次年度以降には、異なる曲率半径における疾走動作の分析を予定していたため、「次回の学会大会、あるいは論文にて質問のお答えができるように励もう！」と研究に対する新たな原動力を得て帰国することができた。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

私の研究テーマは、陸上競技の短距離競技者は曲走路において「どのような動作によって進行方向を変更しているのか」、あるいは、曲走路疾走から直走路疾走への移行において「どのように軌道を曲線から直線に変えながら内傾していた身体を起こしているのか」であり、いずれにおいても対象者（競技者）間で様ではないという結果を得ている（紙幅の都合により詳細は割愛）。今後の課題は、対象者（競技者）が「なぜその動作を選択しているのか」を示すことである。さらに、自身の研究、あるいはその他の研究グループも男性を対象にした研究が多いが、男性の結果を形態などの異なる女性にもすべて当てはまるとは限らないと考えられることから、女性特有の動作についても考えていきたい。
--

4. 学会の様子（写真）



学会中に一番印象的だった研究者の発表



ソーシャルツアーのハイキングで登った山からみたザルツブルクの街

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	折茂 紗英	所属先名称	日本体育大学大学院
専門領域	体育心理学		
共同発表者（所属）	高井秀明（日本体育大学）		
学会大会名称	17th European Congress of Sport & Exercise Psychology		
（和名）	第 17 回ヨーロッパスポーツ心理学会		
発表タイトル	Characteristics of Commitment in Japanese Student Athletes: An Examination from Burnout		
（和名）	日本人学生アスリートにおけるコミットメントの特徴：バーンアウトからの検討		
派遣期間	2024年7月14日～7月21日	開催地	オーストリア・インスブルック

1. 発表内容の概要	発表形式	ポスター
学生アスリートにおける集団の所属やスポーツ継続の要因は、組織コミットメントとスポーツコミットメントから検討されている。本研究では、コミットメントについてクラスター分析を実施し、バーンアウトからコミットメントの特徴について再検討することとした。分析対象者は、日本人学生アスリート471名であった。本研究では、折茂・高井（2023）で使用したデータを活用し、追加調査を行った。分析対象者を分類するため、組織コミットメント、スポーツコミットメントの各下位尺度の標準得点に基づいて階層的クラスター分析を行った。バーンアウトについては、対応のない1要因の分散分析を行い、有意な主効果が認められた場合は、Tukey法による多重比較を行った。分析の結果、4つの解釈可能なクラスターが得られた。次に、バーンアウトの特徴について検討した結果、第1クラスターはすべての下位尺度においてほかのクラスターよりも有意に得点が高かった。さらに、第3クラスターは第2、4クラスターよりも有意に得点が高かった。以上の結果から、日本人学生アスリートにおけるコミットメントは4つのクラスターに分類され、それぞれ異なる特徴をもつことが明らかとなった。		

2. 国外学会参加の成果および感想
今回、私は初めて国際学会に参加しました。隔年で大会は開催されていることもあり、多くの研究者が参加し、多数の発表が同時におこなわれていました。発表内容も運動学習からコーチングまで多岐にわたっていました。英語に不慣れな点もあり発表内容をすべて理解することは困難でしたが、スポーツ集団におけるグループダイナミクスや、近年注目されているアスリートのメンタルヘルスについて多くの学びを得ることができました。ポスター発表時には、クラスター分析の意義や意味、解釈について多くの質問をいただきました。特にクラスター分析については、対象とするサンプルや時期によっても結果が変動する可能性があることから、今後も慎重に検討していきたいです。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来
これまで論文でしか知りえなかった海外の先生の研究発表や講演を直接聞くことができとても刺激的でした。研究発表に対して活発なディスカッションが展開されており、私も積極的にその輪にはいりたいと強く思い、自身の英語力の必要性を感じたのはいうまでもありません。また、スポーツ集団における問題・課題が多く指摘されており、コミットメントという観点において、私は国内外を問わず研究の成果を発信し、アスリートにおけるドロップアウトやバーンアウトを抑制するための視座を今後も提供し続けたいと思います。

4. 学会の様子（写真）
 ポスターセッション会場の様子  学会会場の様子

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	廣澤 聖士	所属先名称	桐蔭横浜大学
専門領域	測定評価		
共同発表者（所属）	青木義満（慶應義塾大学）		
学会大会名称	14th World Congress of Performance Analysis of Sport		
（和名）	第14回世界スポーツパフォーマンス分析会議		
発表タイトル	Predicting Grade of Execution in Figure Skating Jump from Tracking Data: An Analysis of Ladies' Double Axel Jumps at World Championships		
（和名）	トラッキングデータを用いたフィギュアスケートジャンプの出来栄え点の予測: 世界選手権における女子選手のダブルアクセルジャンプの分析		
派遣期間	2024年8月26日～9月1日	開催地	イギリス

1. 発表内容の概要

発表形式

口頭

フィギュアスケートのジャンプの得点は難度と出来栄え点の合計によって決定される。出来栄えは「高さおよび距離が非常に良い」「創造的な入り方」「音楽との一致」など6項目に基づき-5から+5の11段階で評価されるが、基準には解釈の余地があり審判の主観が影響する。本研究では、審判が競技会でどのようなジャンプに高い出来栄え点を付与するかを、複数年度の競技会のデータを用いて予測モデルを構築することを目的とした。19年と23年の世界選手権における女子ダブルアクセルジャンプ66件のデータについて、最大跳躍高、水平飛距離、着氷後の滑走速度、各変数同士の比率と出来栄え点の関係を検討した。ElasticNetと一つ抜き交差検証を用いてパラメータチューニングと精度検証を行った結果、RMSEは0.560、決定係数R2は0.482（調整済みR2:0.429）であり、重回帰モデルよりも精度が高いことを示した。最大跳躍高は競技会を問わず出来栄え点との関係がほとんどなく、審判は飛距離が大きいジャンプに高い出来栄えを与える傾向が見られた。また、先行研究では19年の大会で出来栄え点に寄与する要因とされていた比率の変数が、23年のデータを含めた分析では変数選択によって除外されたため、この結果は大会特有の傾向であることが示された。

2. 国外学会参加の成果および感想

今回初めて本国際会議に参加したが、制限のある実験環境ではなく、介入のない競技会での選手のパフォーマンスの測定と評価を扱うにはふさわしい国際会議であると感じた。欧州地域からの参加者が多く、演題はサッカーやラグビーなど、欧州でメジャーなスポーツに偏っている印象であり、国内からの報告は数件にとどまっていた。そのような状況の中でも、審判の主観的な判定は他のスポーツでも共通するトピックであり、多くの研究者に興味を持ってもらえた。本発表は、要件を満たす発表演題の中から選ばれる3件のうちの1つとしてRoutledge Young Research Awardを受賞し、研究成果を国際的に発信することへの大きなモチベーションにつながった。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

本研究の今後の抱負としては、さらに多様な大会やジャンプ種別を分析対象に加えることで、より汎用性の高い予測モデルの構築や知見の獲得をすることが挙げられる。フィギュアスケートは国内で知名度の高いスポーツではあるが、研究成果の蓄積や科学的な知見の競技現場での活用という点ではまだまだ限定的であると考えている。競技経験者ならではの視点で、国内から世界に向けて研究成果を発信できるようにこれからも精進したい。

4. 学会の様子（写真）



Routledge Young Research Award 受賞者記念写真



FIFA 担当者の招待講演の様子

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	五賀 友継	所属先名称	国際武道大学
専門領域	体育史、体育・スポーツ政策		
共同発表者（所属）			
学会大会名称	13th International IMACSSS Conference & 5th GSMACC 2024		
（和名）	第13回国際格闘技・コンバットスポーツ科学会議（IMACSSS）& 第5回世界格闘技・文化科学会議（GSMACC）2024		
発表タイトル	The Analysis of the Dan/Kyu Grading and Shogo System in Budo and the Characteristics of the Disciplines		
（和名）	武道における段級位及び称号制度の実態と種目による特徴		
派遣期間	2024年10月13日～16日	開催地	マレーシア・クアラルンプール

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
本研究の目的は、武道の段級位・称号制度の歴史的変遷および現状を明らかにし、武道種目ごとの違いを比較・検討することである。そして、段級位・称号制度の違いがその種目に与える特徴を考察した。 武道では、段位と級位からなる等級制度が用いられ、種目によっては称号が併用されている。段級位・称号は大日本武徳会（1895～1946）によって制度として確立され、「修行者の動機づけ」「技能の格付け」「組織内の地位の明確化」「武道家の表彰」「武道家の保護」「指導者の資格」「財政基盤の提供」といった意義が付与された。 1946年に大日本武徳会が解散して以降は、武道種目ごとに統括団体が発足し、それぞれ独自の段級位・称号制度が構築された。日本武道協議会に所属する9つの武道団体を対象として、現在用いられている審査関連規程等を基に比較・検討した結果、①昇級・昇段・昇格にあたって必要な最低修行年数、②指導者資格としての段級位・称号の位置づけ、③段級位・称号審査による収入への依存度の3点において種目間の相違が顕著に見出され、その種目における固有の特徴を与えていることが分かった。		

2. 国外学会参加の成果および感想
発表後、多くの質問があり、終了後も引き続き会場外で対応した。質問者からは、これまで武道に関して英語で入手できる人文科学系の研究の多くは思想や歴史に関するものであり、「制度」について実態と共に研究したものがないこと、複数種目を横断的に調べ、比較検討している点において評価を頂いた。 本学会は、大学等の研究機関に所属する研究者に加え、在野研究者（武道実践者）の参加者が多くあった。日本では、いわゆる研究者ではない武道の師範が学会で発表するということは減多にない。学会期間中、各種武術の演武（写真2）もあり、研究と現場の橋渡しと言う意味で、こういった学会が日本でもあってよいのではないかと感じた。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来
武道の段級位を参考にして、同様の制度が日本以外の武術でも行われていることは知っていた。ただ、その拡がりまでは知らず、参加者からシラット（マレーシア・インドネシアを中心に行われている武術）でも"Kyu"のシステムがあることを聞き、その拡がりに驚いた。今後、他国・地域の武術への影響についても調べ、その実態と共に比較研究すれば、研究をグローバルに発展させられるのではないかと考えている。 他の研究者から何度も言われたのは、日本の武道に関する研究をもっと英語で発信してほしいということであった。今後、学会発表のみならず、論文や出版等でも精力的に武道に関する研究を英語で発信していきたい。

4. 学会の様子（写真）
 
写真1. 発表後の記念品授与（右：報告者） 写真2. シラット演武

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	平賀 慧	所属先名称	筑波大学大学院
専門領域	体育社会学		
共同発表者（所属）			
学会大会名称	2024 East Asian Sport Sociology Forum		
（和名）	2024東アジアスポーツ社会学フォーラム		
発表タイトル	Analysis of discourses on Physical Education for Children with Physical Disability: How was the Individual/Medical Model of Education System Maintained?		
（和名）	肢体不自由児の体育をめぐる言説の分析：個人／医療モデルの教育システムはいかに維持されたか？		
派遣期間	2024年10月17日～10月20日	開催地	台湾桃園市・国立體育大学

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭発表
日本では2012年にインクルーシブ教育の指針が示されたが、現状の特別支援学校は障害種別が反映されている。その契機は、1979年養護学校義務教育化とされ、障害児を地域の学校とは別の場に囲い込むことを義務化し、健常児との分離別学体制が公的になったと言われている（堀家, 2024）。そこで本発表では、1970～80年代の肢体不自由児の体育に着目し、学習指導要領では通常の教育課程と同等であることが求められた一方、実践では障害にどのように対応するのかが議論されたその背景にどのような論理があるのかを分析した。方法はPeers(2022)によるAdapted Physical Activityの教科書の主題分析をもとに、日本の1970～80年代の教育研究誌における肢体不自由児体育に関する論考を収集・分析した。その結果、第一にエイプリズムを反映した記述として、通常教育と肢体不自由児教育の基本は類似しており、運動機能の維持・向上、技能の習得、社会性・情緒の発達という体育特有の目標は障害児にとっても同様に優先されるべきだと主張が示された。第二に、ディスエイプリズムを反映した記述として、障害児の身体能力の欠如と社会性の未熟さが示された。1970～80年代にかけて、これらの言説は障害児体育の拡大と質の向上のために必要なものであったと言える。		

2. 国外学会参加の成果および感想
今回は、自身にとって初めての国際学会での発表であった。発表時間が押してしまったことやスピーキングの練度が低かったことなどは非常に悔いの残る結果となったが、東アジア諸国の研究者が集う国際学会で発表の経験を積めたことは貴重な機会となった。日本の事例を紹介するだけでなく、東アジアの共通点を考えるという問題設定から始めるなど聞き手にとって明瞭なストーリーを意識すべきであった。その一方で、日本国内では交流が少ない先生方からのコメントをいただくこともでき、「楽しい体育論」との接続性や「障害」に限定しないインクルーシブ概念のあり方について考察を深めることができた。こうした議論をもとに、研究を深化できるようより励みたいと強く感じた。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来
2025年7月には、国際スポーツ社会学会年次大会が韓国・ソウル大学にて開催される。例年「Sport and Disability」部会においていくつかの発表演題があるため、自身の研究関心と近い研究者と交流できることを期待している。今回の発表経験や反省点を踏まえた上で、自身の研究内容を分かりやすく発表できるよう準備を進めていきたい。また、障害、教育、体育といったキーワードをもとに、関連する国際学会の情報を収集し、より広範な領域・地域における研究交流を目指していきたい。 この度は、補助金をご支援いただき誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

4. 学会の様子（写真）
 台湾・韓国・日本を中心としたシンポジスト集合写真  個人口頭発表

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	樺澤 茉宝	所属先名称	新潟大学大学院
専門領域	発育発達、測定評価		
共同発表者（所属）	村山敏夫（新潟大学）		
学会大会名称	2024 Bright Start International Conference		
（和名）	2024年度幼児教育国際会議		
発表タイトル	Development and Implementation of a STEAM Education Program through Diverse Physical Play for Young Children		
（和名）	幼児の多彩な運動あそびによるSTEAM教育プログラムの開発と展開		
派遣期間	2024年11月21日～11月25日	開催地	イギリス

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
子どもたちが運動あそびによって数の概念を習得する新たなSTEAM教育のアプローチについて、20分間の口頭発表と10分間の質疑応答を行った。近年、算数・数学の好き・嫌いの二極化、運動あそびの機会減少による体力・運動能力の低下、幼保小接続問題といった教育上の課題が指摘されている。幼児期は心身の成長において重要な時期であり、多様な運動あそびの経験が健全な発達に寄与することが示されている。また、幼児が数の概念を形成するためには、日常生活や遊びを通じた具体的な体験が欠かせない。そこで本研究では、体感的な学びを目指したSTEAM教育プログラムの開発と実践について報告した。特に、地域イベントや保育園・幼稚園での実践事例、さらにはその有用性についても例を挙げた。さらに、運動あそびを通して子どもが自然に数の概念を習得できる新しいSTEAM教育の仕組みと、その地域展開に関する議論も行った。子どもたちが主体的に学ぶことを楽しむ社会の実現に寄与し、日本の教育モデルを世界へ発信する一助となることを目指し、本研究の成果により社会課題への解決策を提供できると考える。		

2. 国外学会参加の成果および感想
学会会場には各国の取り組みに関する展示ブースや子どもたちが創造性を最大限に活かせるようなあそびスペースなどが設けられており、先駆的かつ有効的な教育環境づくりについて学ぶことができた。また、発表の際の質疑応答の時間では、参加者との意見交換により、報告したSTEAM教育プログラムに対する保育者の参加可能性や教育現場での応用について議論が深まった。また、実践的な研究への評価を受け、本研究の意義が確認された。発表後には、イギリス、ドイツ、アメリカ、オーストラリアなどから参加した教育専門家や現場の先生方との意見交換の場が得られた。他国でのSTEAM教育や幼児教育の実践例を知るとともに、国際的なネットワークを築く機会となった。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来
本研究をさらに発展させるためには、子どもたちがSTEAM教育プログラムを通して得た能力が小学校以降の発達にどのように影響するかといった長期的な追跡調査を行い、さらに海外研究者と連携して多文化的な視点を取り入れたプログラムに展開させていく必要がある。今回の経験を通して、発達課題の早期発見を支援する最新の実践や早期介入戦略に焦点を当てたユニバーサルプランを提案・議論することを通して、国際的な幼児教育モデルへの理解を深めていく。また、本研究の国際学会での発表で得られた成果を基に、STEAM教育の新たな可能性を切り拓き、幼児教育の現場に役立つ知見を構築していく。

4. 学会の様子（写真）
 
口頭発表の様子 展示の様子

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	太田 明李	所属先名称	中京大学大学院スポーツ科学研究科
専門領域	体育社会学		
共同発表者（所属）	伊藤央二（中京大学スポーツ科学部）		
学会大会名称	2024 TTTRA ASIA PACIFIC ANNUAL CHAPTER CONFERENCE		
（和名）	2024 TTTRA アジア太平洋観光学会		
発表タイトル	Supplemental Tourism Activities Among Away Football Spectators in Japan: A Focus on Spectator and Tourist Orientations		
（和名）	日本におけるアウェイサッカー観戦者のサプリメンタル観光行動：観戦・観光志向に着目して		
派遣期間	2024年11月30日～12月3日	開催地	タイ・バンコク

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭
スポーツツーリズムではスポーツ活動（スポーツ観戦等）と非スポーツ活動（観光地巡り等）が密接に関わっており、主目的の観光行動の前後に行う副次的な観光行動であるサプリメンタル観光行動が重要となる。そのなかでも観戦と観光が融合するアウェイツーリズムでは、アウェイツーリストは観戦志向および観光志向を持ち合わせており、各志向の程度によってサプリメンタル観光行動は異なることがうかがえる。したがって本研究では、観戦・観光志向のタイプ別によるアウェイツーリストのサプリメンタル観光行動を明らかにすることを目的とした。2024年7月14日と8月17日に豊田スタジアムで行われたJリーグの試合において、アウェイツーリストへの質問紙調査及び面接調査を行った。観戦・観光志向のデータからIP分析（Important Performance Analysis）を実施し、アウェイツーリストをシリアス観戦観光者、シリアス観戦者、シリアス観光者、カジュアル観戦観光者の4つに分類し、各タイプのサプリメンタル観光行動を明らかにした。主要な結果として、高い観戦志向を持つシリアス観戦観光者とシリアス観戦者は異なるスポーツの試合観戦をサプリメンタル観光行動として行うことが明らかとなり、スポーツ種別の垣根を越えた連携が求められることが示唆された。		

2. 国外学会参加の成果および感想

セッションに参加していた研究者から、発表スライドに関する良い評価をいただくことができた。また、自身の研究ではアウェイツーリストのセグメンテーションの分析手法としてIP分析を用いたが、同じ分析手法を用いて洞窟観光者のセグメンテーションを行った他の研究者から、IP分析についてのアドバイスをいただいた。IP分析は様々な手法があるため、今後の研究では異なる手法にも挑戦し、より質の高いIP分析を用いたセグメンテーションができるよう取り組みたい。また、自身の研究領域であるスポーツツーリズムに関する研究発表はなかったものの、アウトドアスポーツツーリズムと関連のあるネイチャーツーリズムの研究発表が多く、新たな刺激を得ることができた。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

アウェイツーリズムは第2期スポーツ未来開拓会議中間報告（スポーツ庁・経済産業省, 2023）において推進されているものの、国内では学術的に焦点が当てられていないスポーツツーリズム行動であるため、今後も継続的な知見の蓄積に努めていきたい。特に、今回の国外学会では観光研究の多様なアプローチ手法を学ぶことができた。そのため、今回学んだ知見を活かし、アウェイツーリズムをさらに多様な視点から捉え、我が国のアウェイツーリズム推進に貢献できるような研究となるよう努めていく。

4. 学会の様子（写真）



学会会長Dr. Aaron Thamと研究室メンバーでの集合写真



口頭発表の様子

2024年度 国外学会参加報告書

報告者氏名	甲谷 勇平	所属先名称	慶應義塾大学
専門領域	体育心理学		
共同発表者（所属）	佐藤優介（慶應義塾大学）、白坂成功（慶應義塾大学）		
学会大会名称	30th Annual SMAANZ Conference		
（和名）	第30回 オーストラリア・ニュージーランド・スポーツマネジメント学会 年次大会		
発表タイトル	The Effect of Sport Psychological Safety on the Burnout Tendency Process		
（和名）	スポーツ心理的安全性がバーンアウト傾向プロセスに与える影響		
派遣期間	2024年12月4日～12月6日	開催地	ジーロング（オーストラリア）

1. 発表内容の概要	発表形式	口頭発表
本研究の目的は、スポーツ心理的安全性尺度（SPSI）の下位因子（精神的に健康な環境、メンタルヘルスリテラシー、セルフスティグマの低さ）とアスリートバーンアウト尺度（ABI）の下位因子（個人的成就感の低下、情緒的消耗感、チームメイトとのコミュニケーション不足、自己投入の混乱）との関連を構造的に明らかにすることである。先行研究に基づき、ABI下位因子間の関係を仮定した上で、ABIの下位因子構造に対してSPSIの3つの下位因子がそれぞれどのように影響を与えるかを仮説モデルとして構築し、共分散構造分析を実施した。その結果、ABIの下位因子は、個人的成就感の低下→チームメイトとのコミュニケーション欠如→競技への自己投入の混乱→競技に対する情緒的消耗感のプロセスを持つことが明らかとなり、SPSIの環境的側面（精神的に健康な環境因子）はバーンアウト傾向の序盤から中盤（成就感の低下～自己投入の混乱）に影響し、個人的側面（メンタルヘルスリテラシーとセルフスティグマの低さ因子）は終盤（情緒的消耗）に影響することが明らかとなった。本研究は、メンバーのバーンアウト傾向プロセスに対して、心理的安全性が個別具体の影響を与えるという新たな知見を提供した。		

2. 国外学会参加の成果および感想

当カンファレンスは、立場や役職に関わらず誰もが自由に意見を発し、知見を深め合う共同の学びの場であった。得られた成果としては、当学会では、組織レベルでの議論が主として行われており、分析手法として質的調査が用いられていることが多かった。質的調査をどのようにまとめ（分析し）、理論的な示唆を導き出すかという、質的調査の分析についての知見を得ることができた。また、私自身の発表に対する質問として、とても印象的な質問だったのが「この結果は日本文化独自のものだと思いますか？」という質問だった。私はこれまで文化差に着目したことはあまりなかったが、この質問を受け、日本の結果を海外で発表する際に、文化というものを考慮することが重要な考察の1つに成り得ることを学んだ。

3. 今後の抱負／本研究が拓く未来

バーンアウトと心理的安全性の詳細な関連について明らかにできたため、今後は、スポーツ心理的安全性の3つの下位因子それぞれに対して介入を行い、アスリートのバーンアウトの予防・低減に向けた心理的安全性向上プログラムを開発していく。ここまでは主にスポーツ心理学の知見を主としているが、プログラムの効果検証やプログラム導入・浸透のためにはスポーツマネジメントの知見が必要になってくる。その点について、当学会大会で得られた分析手法の知見や組織だけではなく地域や行政といったより広い視野からアプローチすることで、より良いプログラム開発・導入につなげていきたい。
--

4. 学会の様子（写真）



一部屋20名ぐらい参加者がおり、
活発な議論が行われた。



セッションの合間のコーヒープレイクでも
交流が行われた。